

花王教員フェローシップ「スリランカの寺院のサル」体験報告書

■ 報告者：奥土晴夫（沖縄県糸満市立三和中学校教諭）

□ 調査日：2004年8月2～14日

1) プロジェクトから学んだこと

スリランカ、中央部の都市ポロンナルワでテンプルモンキー（ニホンザルと同じ Macaca 属）の生態調査を体験しました。世界各地から集まったボランティアがグループに分かれ、役割分担を決め、群れ全体の移動記録と特定個体の行動記録（摂食活動、移動、休息、グルーミングなど）を行いました。私は個体の行動記録を担当しました。当初は近づきすぎてサルがこちらを意識して行動が不自然だったり、離れすぎて見失ったりしましたが、だんだんと適度な距離が分かるようになりました。さらに慣れてくると特定の個体を追いながら、群れ全体の状況や行動、サル間の上下関係なども見えてきました。群れの移動中、森林内をサルと同じスピードで歩いていると自分もこの群れの一員としてとけ込んでいるようで、サルにおまえも同じ仲間だと認められたような感動を覚えました。

調査結果から、群れごとのテリトリーの大きさやそこにある資源量（主にえさの量やその種類）を比較することで群れの現状や今後の群れの離合集散を推測できること、特定個体の追跡から群れ内の地位の違いによる行動パターンの違いが見えてきました。

環境やそこに生きる動植物を保護するには、彼らの詳細な生態を知らなければなりません。そのためには地道な調査とそれを支える多くの時間とお金が必要です。

今回のプロジェクトを通してこのことを再認識しました。プロジェクトに参加したボランティアの多くは目的意識もあり、調査の意義や必要性について認識を深めたと思いますが、地元住民の野生生物の調査に対する意識はやはり低い。サルが近づくとあからさまにいやがって、追い払います。野生生物に対する保護や環境保全は広い視野で将来を見据えた立場から政府あるいはアースウォッチのようなNPOが推進する必要があると考えます。住民においては経済的な余裕があって初めて意識が高まることも事実だと思いました。

また、国際理解という意味でも今回の体験で得たものが多かったと思います。文化や習慣の違いは興味深いものでした。

スリランカの地元スタッフやボランティアのメンバーと寝食を共にし、スポーツを楽しんだり、調査活動を進めるといった交流の中で多くの共感を得ました。同時に英語の理解力（特に会話力）不足による孤立感も感じました。どんな分野であれ世界（今後は日本国内でも）を舞台に活動するには英語力の必要性を痛感しま



した。あと2週間現地にいれば、もっと英語が理解できるようになったかもしれません！？

2) 今回の体験が学校教育にどのような意味を持つか

野生動物調査の面白さや計画の立て方、ワークシートの作り方、得たデータをまとめていく科学的手法などは、私の担当教科の「理科」で応用できるものが多くありました。早速、本校「総合的な学習の時間」1学年のテーマ「地域探訪」で私が担当している自然班において海岸生物調査を計画しています。また今年度だけではなくライフワークとして、生徒を巻き込みながら私なりに地元の自然や環境についての調査を継続していきたいと考えています。

「スリランカの自然や文化」についてはすでに授業を通して生徒に紹介しました。さらに「総合的な学習の時間」「学級活動」など、機会あるごとに生徒に今回得た調査活動や国際理解といった体験を伝えていくつもりです。何事も自分がやりたいと思ったらどうにかなるということも事実です。少しの勇気さえあれば、できないことはない！ はじめからあきらめないでトライ、トライ、トライです。専門性や英語力など必要な能力は後からついてきます。このことを生徒に一番伝えたいと思います。

